山城志

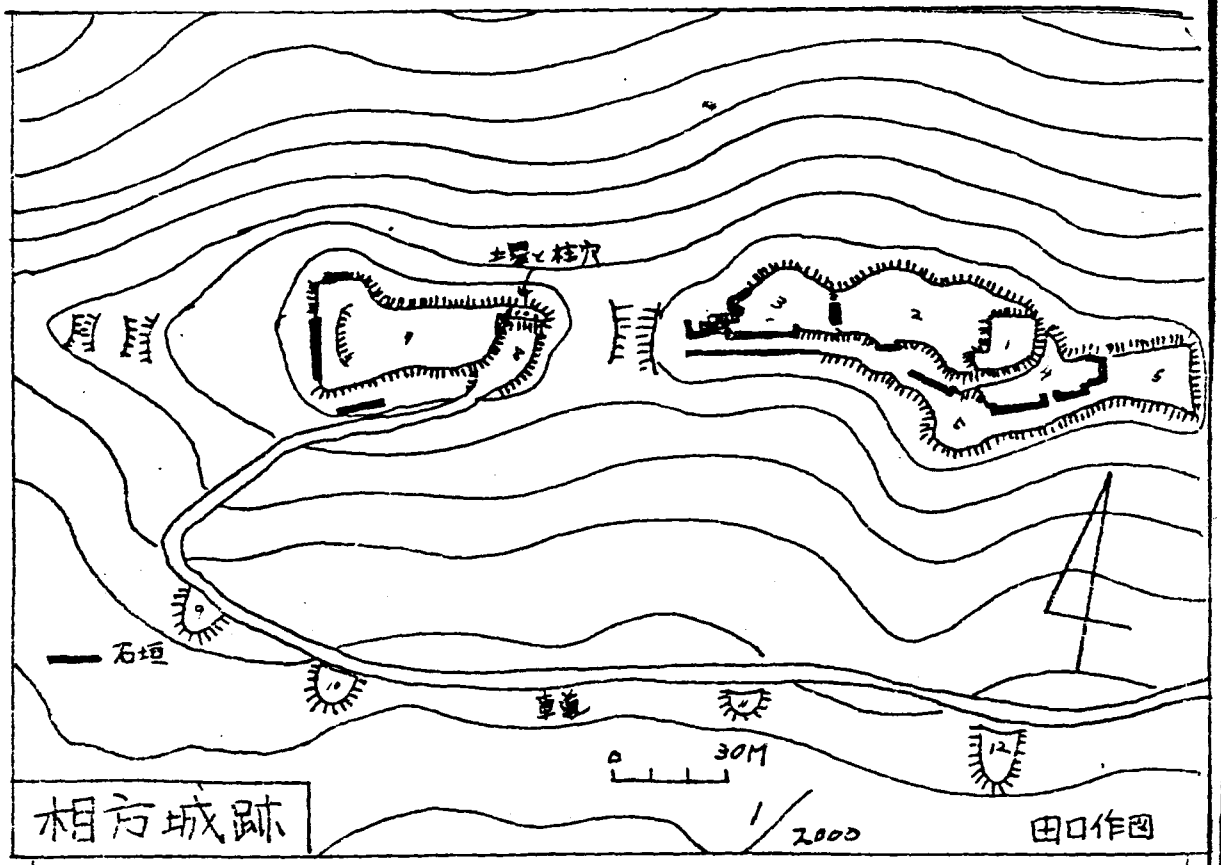
第二巻壱号　S58年1月号

（目　次）

P1----有地氏とその居城　田口義之
〃7----古代山城症候群　窪田東国
〃14----山城のイメージ　吉田和隆
〃16----「資料紹介」備後国福山御領分古城記
〃20----古代山城を訪ねて　七森義人

備陽史探訪の会
城郭研究部会編

No.



(有地元盛の居城した相方城略図)

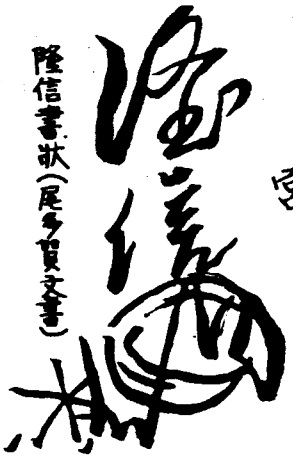
200 24
S
2-1

有地氏とその居城

備後中世史研究会々員　田口義之

中世後期、現在の福山市芦田町一帯を領した有力国人衆に有地氏がある。呂治郡新市(現芦品郡新市町新市)の亀寿山城を本拠に備後最大の勢力を誇った国人大名宮氏の分家で芦田郡有地村(福山市芦田町有地)に土着したため有地氏を称したといわれる。その分出の時代は判然としない。萩藩閥閲録83、有地右衛門書出によれば室町時代中期①、備後古城記によれば天文初年(1530頃)②、又、山名伝記によれば康暦元年(1379)には備後の国人として有路(地)氏の名が③見える等、諸説がある。一般には備後古城記等④に伝えられる説が信じられている。

註①「宮下野守兼信(従四位下後入道)
此代より武家に改之也 亀地山の城主也。尊氏公之時賜安堵之御判、兼信氏信元弘より永和に至る数年所々合戦軍功抽群候
(二代略)「筆者」
宮下野守貞清(治太郎左エ門尉)
赤松退治之時 武信 宗信 政信 長信一所戦功 貞清八十歳 於諸所有戦功 文安五年死八十七歳
武信継本家、宗信領有地、政信領日野、宮三家是なり。」とある。


隆信書状(尾多賀文書)

② 芦田郡上有地村の条に「有地石見守清元 天文三年初住」とある。

③ 芸備地方史研究71号 及川大渓「備後と山名氏」による。

コクヨ コピー51D (32×22)

註④ 西備名区、福山志料、相方城主有地殿先祖覚等

確実な文書に見える初見は「毛利家文書」225号、弘治三年十二月二日付毛利氏親類衆年寄衆并家人連署起請文で有地刑部少輔隆信の名が見える。 この文書は当時、毛利氏の勢力下に入った備後国人衆が毛利氏(元就、隆元)と共に軍規の厳守等を誓ったものであるから、この頃には有地氏も毛利氏に属していたことがわかる。

伝説①によれば隆信は弘治年中(1555〜57)、東隣の福田村(福山市芦田町福田)利鎌山城主福田遠江守を討ち、福田領を押領し、嫡子民部少輔元盛の代には新市附近の本家宮氏の旧領をも合せ領し、北は神石郡高蓋村(神石郡三和町高蓋)、西は芦田郡栗柄村(府中市栗柄町)、東は近田(福山市駅家町近田)、迄その支配下に収めたといわれる。

しかし、弘治年中討ち滅したとされる福田氏は天正年間(1573〜1591)に至っても毛利氏に属して活躍している②等、その所伝には誤りも多い。

註① 西備名区、相方城主有地殿先祖覚等。

② 萩藩閥閲録2巻P295 天正8、9、19付小早川隆景書状等。又、「東作誌」清居山新瀧寺棟札に

永禄十二巳(1569)十二月十九日願主権律師重明
奉造立佛檀成就時地頭備後国住福田三郎右衛門尉代官寺岡備前守諸旦那繁昌
藤原宗次大工宗五郎 (整雅)

とあり福田氏の存在が確認できる。

毛利御家八ケ国御時代分限帳①によれば天正十九年(1591)頃には有地美作守(元盛)は備後から出雲に移って1500石余を領している。 この石高は貫高を石高表示に改めただけのもので②、1500石が有地氏の備後における本領の貫高と推定すれば、その本領は江戸時代の村高で3000石前後③となる。 この石高は上・下有地

相方各村の村高の合計と大差はなく、他に所領があったとしても本領はほぼ有地村(上・下 相方村を含む)一ケ村④であったと推定して誤まりはないであろう。

註① 山口県立文書館「毛利文庫」蔵。

② 加藤益幹「毛利氏天正末惣国検地について」歴史学研究 No 496。

③ 毛利氏惣国検地の石高は貫高と同じ年貢高であるから(註②による)年貢率を5公5民とすれば $1500 \times \frac{10}{5} = 3000$ で江戸期村高で3000石位の土地となる。

④「備陽六郡志」外篇 芦田郡之二 上有地村の条に「福島引渡之節まて上有地、下有地、相方と分たず壱ケ村にて大永の頃より天正の末まて有地氏三代之領地なり。」とある。

有地氏は毛利氏に属して各地で軍功があったが江戸期の家臣のように完全に服従していたわけではなかった。永禄十二年(1569)八月、藤井皓玄が尼子勝久に応じて神辺城を奪取った際には、木梨氏の本拠鷲尾山城(尾道市木梨)とともに、有地氏の拠城(大谷城か?)にも備南の動揺を静める名目で毛利氏の兵が入城している。これは有地、木梨の両氏に不隠な動きがあったためと思われる①。又、天正十年(1582)六月、毛利氏が備中高松で羽柴秀吉軍と対陣中、毛利方の上原元将②が秀吉方に寝返った時に陣中の動揺を押えるため久代、古志、木梨氏等と共に有地氏もいち早く毛利氏から人質を取られている③。このように有地氏は毛利氏から常に疑惑の目で見られていて(裏返せば有地氏は毛利氏に心服していなかった)、「侍は渡り者にて候」と言われた戦国武士と同様半独立的な性格を多分に持っていて、「毛利に忠節を尽した勇将有地元盛」と一般に言われるようなものではなかったことは確かである。天正十九年、有地氏が出雲に移されたのも有地氏を先祖伝来の本拠地から移し、その勢力を弱める

ための毛利氏の政策であったと思われる④。

註①萩藩閥閲録2巻P343 楢崎筑後守私申上条々事に「(略)中にも備後神辺之城、備中之藤井一類之者共、阿波之三好家之手合仕忍び取申候、備後国中いつき再発仕様候處、木梨・有地両城へ三河守兄弟之者共さし籠、家中の人しち取置云々」とある。

②備後有力国衆和智氏の分家上原豊将の子で右近大夫と称し、世羅郡甲山町甲山の今高野山城主でその妻は毛利元就の娘。

③註①の楢崎筑後守私申上条々事に「一、先年大閤様高松清水の城へ御取かかりの時、上原迷心の時、隆景様御陣以外御気遣被成候、すてに御引のきの様御座候つ、私親三河守へ御尋を被成候、御縁者上原さへてきニ罷成候上ハ、風々共無御心元被思召との御意候つ、三河守申様には、上原ひはたノ城持こらへ候儀不相成候て、命こいの御てきを申たると存候、先三河守ら為人質、孫五郎、右近兄弟・中務少隆景様御陣所へ上ケ申候、左候て木梨・有地・古志・久代方の人しち をハ三河守陣所ニ取置候」とある。陰徳太平記等にも久代氏が秀吉に内応したという伝えがあることを考え合せれば有地氏等も秀吉から調略を受けていたと推定してもよいと思われる。

④他の国衆、古志氏は所領を没収せられて没落し、木梨、久代両氏も所領の大部分を没せられた。

さて、以上のように備後国人衆の一人として名を馳せた有地氏であるが、城郭の面から見るとどうであろうか。初期の居城国竹城は低丘陵上に築かれたもので郭面積は広いものの防備が弱く居館といった方が良い、天文年間に築かれ

たと思われる大谷城は有地谷の奥まったところにある峻険な山城で多数の郭を持ち土塁・空堀で厳重に防備された戦国城郭である。おそらく有地氏は平時は国竹城に居住し、一朝事有る時は大谷城に籠ったのであろう、又、有地元盛が天正初年に築いた相方城(芦品郡新市町相方)は標高190mの山上に全面的に石垣を使用して築城され、櫓、城門等も白壁瓦葺きの本格的なもので中世城郭から近世城郭への移行途上の城郭として小早川隆景の築いた新高山城(豊田郡本郷町)神辺の黄葉山城と共に県下でも貴重なものである。すなわち、有地氏は平時の居館である国竹城から戦乱の時代を迎へて山城である大谷城を築き、安土桃山時代に入ると近世的城郭である相方城を築城するというように、時代と勢力に応じた城郭を築いて室町戦国という戦乱の時代を生き抜いたのである。

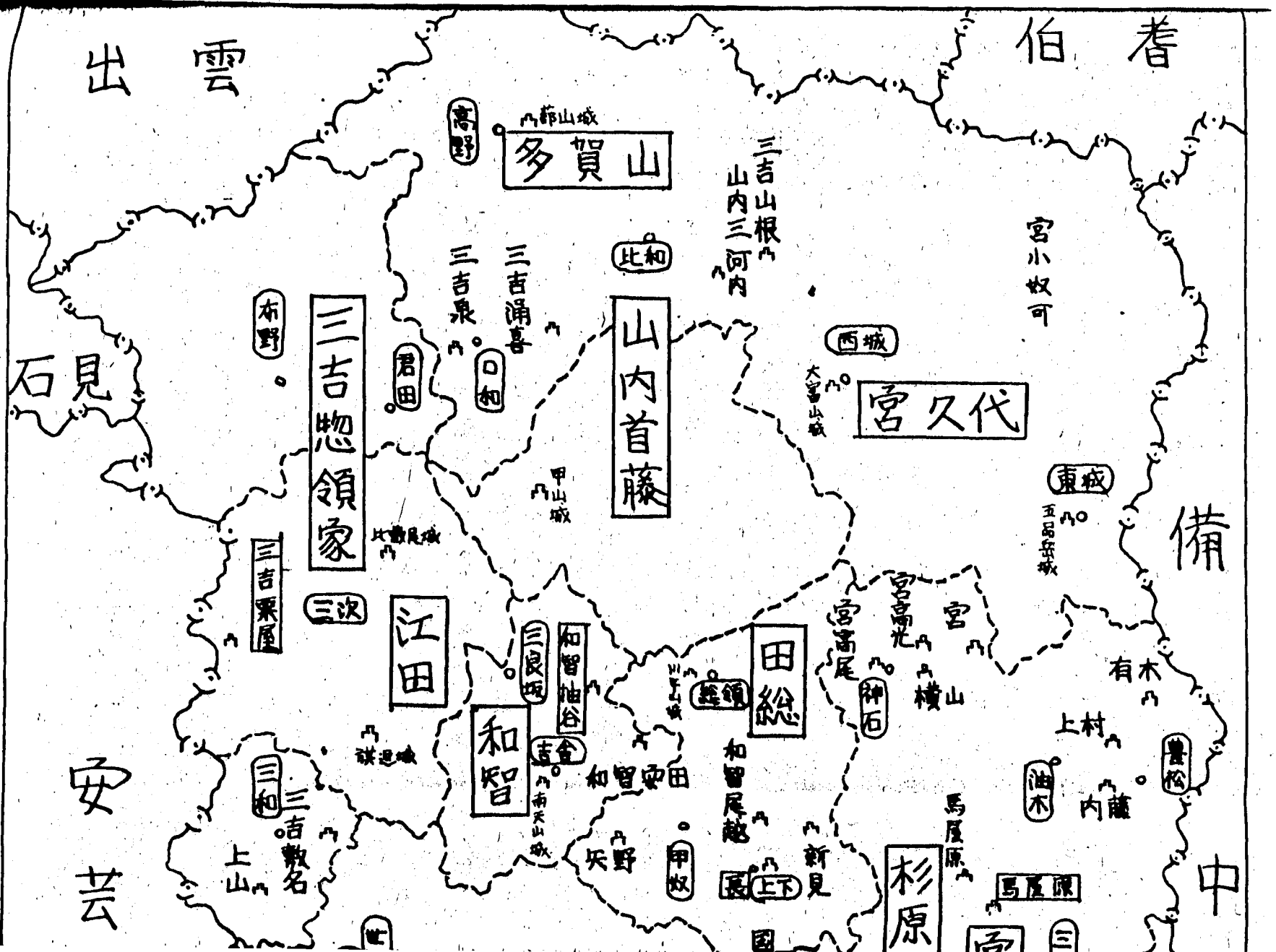
以上、有地氏とその城郭について述べてみたが、この小文は概略であって筆の足りないところが多くある、筆者の遺憾とするところであるがいづれは又、述べる機会もあるであろう。

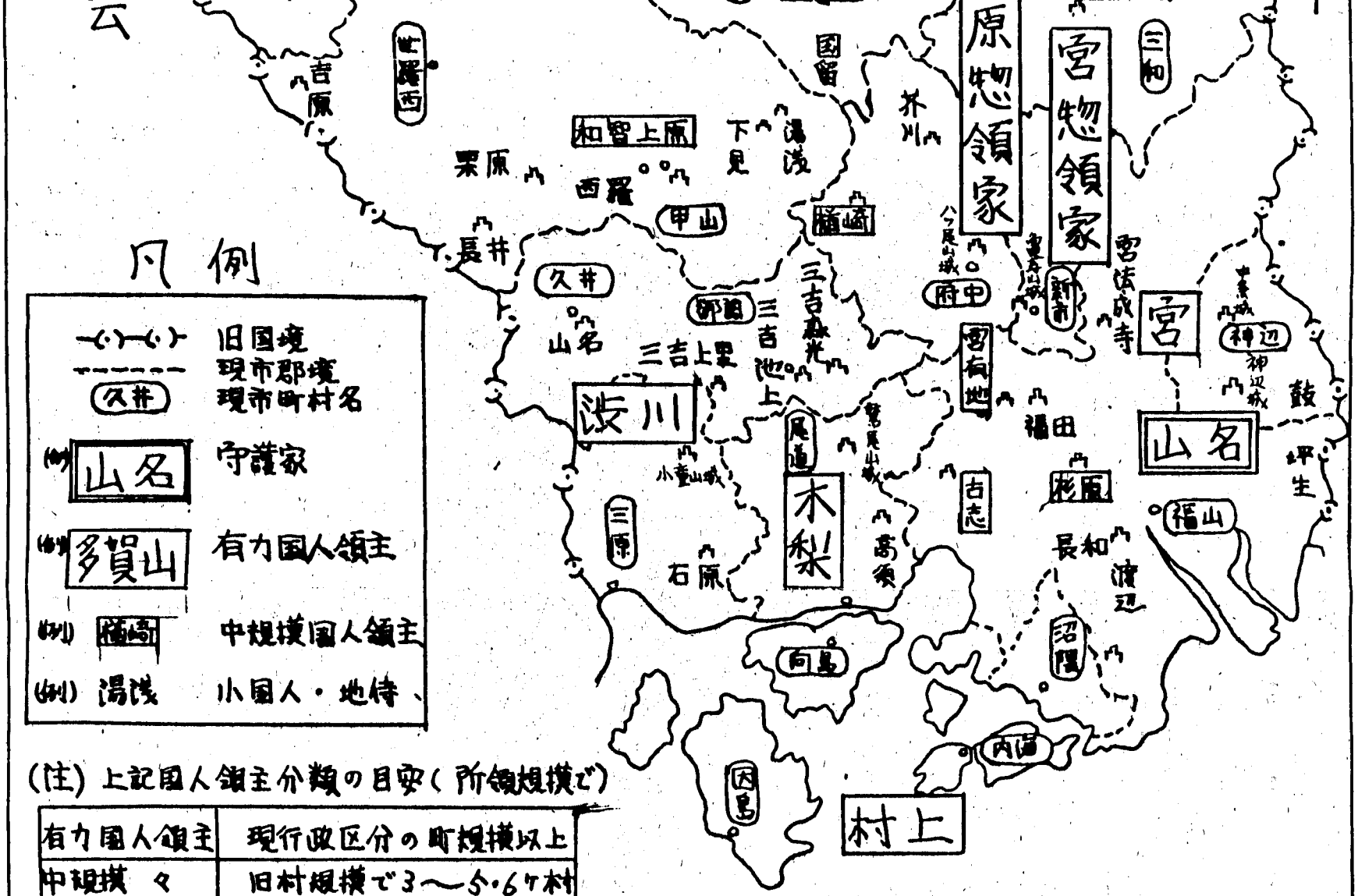
《福山市芦田町下有地本安寺にある"伝有地氏墓石"》
(撮影 井川博文氏)

今日のところはこの辺で筆を置かせていただきたい。(畢)

(次ページ写真) 上より 南より見た相方城山、相方城本丸(西より望む、戸手天王社に残る移建された相方城々門。

コクヨ コピー51D (32×22)


出雲
伯耆
石見
備中
安芸
高野
節山城
多賀山
三吉山根
山内三河内
宮小奴可
比和
三吉泉
三吉涌喜
布野
三吉惣領家
君田
口和
山内首藤
西城
大富山城
宮久代
甲山城
東城
五日市城
比婆見城
三吉栗屋
三次
江田
三良坂
和智油谷
和智
吉舎
南天山城
三和
三吉敷名
上山
祇園城
山内領
田総
宮富尾
神石
宮高光
横山
宮
有木
上村
豊松
油木
内藤
和智安田
和智尾越
矢野
甲奴
新見
上下
馬屋原
杉原
馬屋原
宮



(注) 上記国人領主分類の目安(所領規模で)

有力国人領主	現行政区分の町規模以上
中規模 〃	旧村規模で3〜5・6ヶ村
小国人領主	旧村一ヶ村前後

但し、此図に載せるものは確実な文献資料と現地に遺跡が残るもののみ。

室町戦国 備後の国人領主

Y.T制

古代山城症候群 Part 1
シンドローム

栗田東国

▨今何故古代山城か

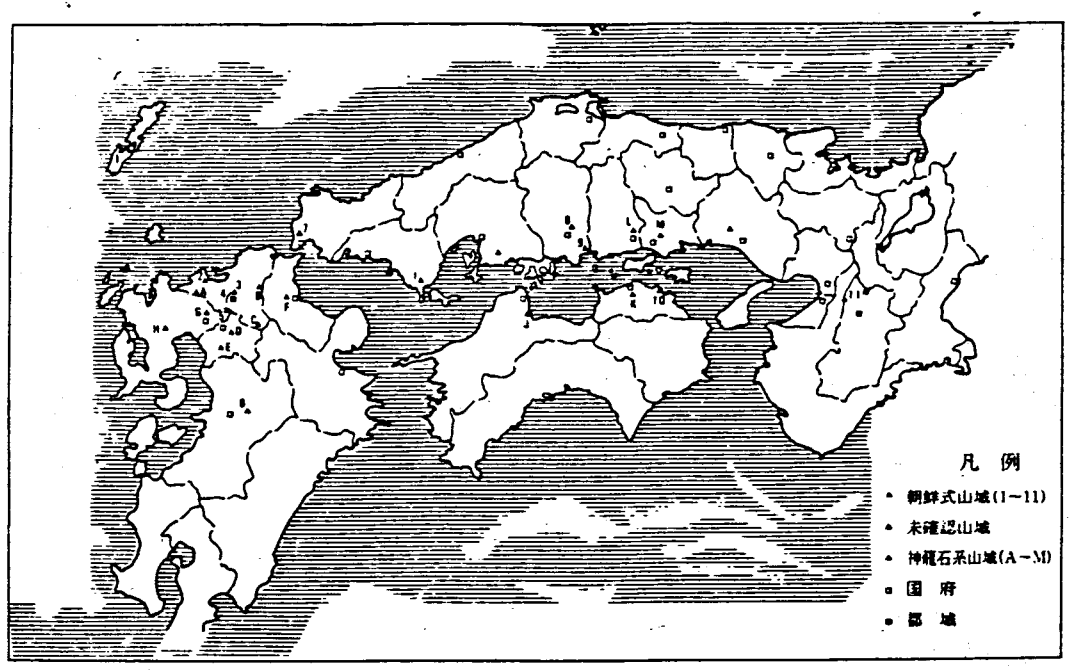
昨年暮も押しせまった時期にかなりドタバタとした感じで発足した私達『城郭研究部会』は今その活動のひとつの軸として神籠石ー朝鮮式山城の解明ということを据えている。朝鮮式山城とは時期的には6〜7世紀わが国が公民国家体制に収斂していく過程に於て、ほとんど唐突といった感じで発生し消滅していった軍事施設であり、また今のところ九州北部と瀬戸内沿岸にしか存在しないという特徴を持っている。ちなみに言うなら我が備後の国にも文献上「常城」「茨城」の二城があったことになっているがまだその位置は確実には判明していない。

古代山城に関る謎はあまたあるであろうが大まかに言うならそれは(イ)誰が(築造主体)(ロ)何時(築造時期)(ハ)何のために(築造目的)という問いに類別できよう。そしてその答えが個々の山城に於て一様でないところにこの研究のややこしさがある。例えば大和政権が対外防衛のために築ったとされる城もある。またどうも地方勢力によって築かれたらしいと思われる山城もある。しかもそういうところには必ずと言っていい程大和に対する反乱伝承が伝っている。とするなら先にあげた大和製山城もそのいくつかはもともとは対国内戦用に構築されたものではないかとの疑問も湧いてきて要するに何ひとつ確からしいものは残らぬ様になっている。

しかし逆に言うならこの程度のことでさえ議論百出定まらないのが古代史の現在であり、私の予感を言うならこの不確実さというものは従来あたかも自然的な推移であるかの如く語られてきた畿内勢力による国家統合という〈確からしさ〉に対し激しく修正を迫るものとなるかもしれない。山城は軍事施設であり軍事施設であるということはそれが実際に使用されたか否かにかかわらず古墳の分布などとはまた違った赤裸な時代の相を映し出すであろうからである。今回は第一回目であり私自身の蓄積も余り無いので古代山城についての概要と若干

のコメントを付しておくに止めるが、図を追って古代山城のはらむ問題を取り上げて行きたい。その中で古代吉備国とか吉備国に於る備後国の位置とかも当然対象になってくるであろう。

▨ 古代山城の概要



1	金田城	7	長門城	A	雷山	G	帯隈山
2	怡土城	8	常城	B	鹿毛馬	H	おつぼ山
3	大野城	9	茨城	C	杷木	I	石城山
4	水城	10	屋島城	D	高良山	J	永納山
5	基肄城	11	高安城	E	女山	K	城山
6	鞠智城			F	御所ヶ谷	L	鬼ノ城
						M	大廻小廻

第1図　古代山城分布図

（『鬼の城』より無断転用）

先程から古代山城とか朝鮮式山城とか神籠石とか適当に言葉を使っている感があるのでまずこれらの名称をきっちり押えておこうと思う。上図に見られる様に古代山城は朝鮮式山城と神籠石系山城とに分けられており、この二系統有るところに日本の古代山城研究の歴史も同時に語られているからだ。まず朝鮮式山城とは660年百済が唐・新羅連合軍のために滅され663年百済再興のために日本から派遣した軍隊も白村江の海戦で尽く敗れるという半島での政治情勢の激化に対応するために天智朝

が国家として構築した対馬－北九州－瀬戸内沿岸－畿内と広域にわたる本土防衛のための山城である。これらは全て『日本書紀』に記載があり築造主体・時期・目的が一応明らかである。

664（天智三年）　対馬・高岐・筑紫に防人と烽を置く。筑紫に大堤を築いて水を貯えしむ。これを水城という。

665（〃四年）　達率・答体春初を遣して長門に城を築く。達率・憶礼福留・四比福夫を筑紫に遣して大野・椽の二城を築く。

667（〃六年）　倭国に高安城、讃岐に屋島城、対馬に金田城を築く。

670（〃九年）　また長門に城一、筑紫に城二を築く。

見られる如くこれらの山城は亡命百済軍人の指導によって築かれたものであり、当然のことだが朝鮮に数千単位で存在する山城と極めて構造が類似するところから朝鮮式山城の名称が与えられた。他にも朝鮮式山城と呼ばれるものはあるが、大体朝鮮式－神籠石系の区別はただ『日本書紀』『続日本紀』等の正史に記載があるか否かといったことにすぎないため山城の性格としてはずい分まちまちであろうと考えられ天智年間の対外緊張の産物としては一応上記グループまでがワンセットであろうと思われる。例えば茨城・常城・鞠智城は築城年代が明らかでない。かつ鞠智城は本土防衛構想から見ると非常に意味のないような場所に在る。

（天智期の築城が対外情勢への反応の産物であるとは、どの本を開いても書いてあることであり、私もそう思うが、例えば次の様な疑問にはどう答えるのであろうか。「四国の屋島の城は倭国最後の防衛拠点であると言われるが、もし唐の水軍が屋島を無視してそのまま畿内へ攻め入ったとするならどうするのだろう」これは笑い話ではない。防衛とはその場所に応じて異った形態を取るべきはずのものである。例えば対馬・北九州は侵略軍にとっては当然押えておかねばならない兵站地であり、ここでは内陸戦も含むものである。しかし瀬戸内海は敵にとってただ通過すれば良いところであって、これを阻むものは水軍を中心とした戦いであることさら大きな山城などを必要としないはずである。

さてこれらのことをふまえて天智期の築城とは何かと問うてみるとそれは倭国侵略に備えるものであると同時に対外的危機が再び起

すであろう内的危機ー地方豪族の不平不満をバックとした内乱ーに対処するという二重の目的を持ったものであったと言ってさしつかえ無かろう。私はまだ手を付けていないが、朝鮮三国からの渡来人の分布図とこの山城の場所を付き合わせて見たら、案外面白い結果が出るのではあるまいか。)

一方神籠石の方は明治年間に「神籠石論争」なるものがその性格付けをめぐって争われた様に、それはつい最近まで山城であるとは認められなかった。神籠石は朝鮮式山城と同じく列石が山頂をとりまく形で続いているのだが一見してわかる違いはこの石列が余りにもきれいにすき間なく並んでいることである。かつこの列石が一段しかつまれていないことが防衛目的というには少し弱いところであった。しかも列石で囲まれた内部にはほとんどの場合神社が存在することから、これは神域を他所から分離・区別するためのものであろうとされた。ところが戦後おつぼ山の発掘調査で列石と版築土塁が組み合わさっている部分が発見され、列石は単独にあるのではなく土塁の土止めとして使われたものとして神籠石＝山城説の方が有力になって来たのである。築造年代については先の天智年間の山城よりさかのぼるであろうことは大方の認めるところである。(天智期の築城にしてもそれが一年や二年で作れるものではないことから、もともとあった神籠石系の山城を修復したものが朝鮮式山城と呼ばれるものであるのではないかという説もあり、なかなか魅力のある考え方であると思う)しかしその時期がいつまでさかのぼれるかについては築城目的と同じく説が分れている。

(1) 地方勢力が対大和の反乱の拠点として築いた。鬼の城・大廻小廻(あるいは城山も)は吉備の反乱、九州の神籠石は磐井の反乱に使われたとする。時期的には五世紀末から六世紀前半(しかし反乱そのものでなく対峙の時期とすればもう少し後でも良い)。

(2) 逆に大和勢力が地方勢力を圧するために作ったものとする。時期的には屯倉を設置したころ(六世紀半ば)から国府の附属山城として作った(七世紀)ころまで、さまざま。

(3) 山城が攻撃用に転化できる程密集していないので渡来人がもっぱら「逃げ込み」用の城として作ったものとする。六世紀以後。

以上が大体主たった説である。いずれが真かを判断する材料が少なすぎるのでどうこう言えないが私が魅力を感ずる説は(1)である。大和側の正史に記録されていないというのはやはり別の主体によって作られたと考えても良いのではあるまいか。それとも九州にしろ吉備にしろ山城のあるところには不思議と渡来人の存在を匂わせる材料が多い。渡来集団のあり様といったものが従来「帰化人」としてとらえられていたよりもはるかにスケールの大きい(それは文化集団・技術集団であるばかりでなく政治集団であったという様に)ものであったという説も最近では認められているようであるから、それを信ずるならば(1)と(3)は別に矛盾しないであろうと言える。

▨ 反乱伝承としての「温羅伝説」

朝鮮式山城はわが国に於て果して実際役にたったのかという疑問は山城を研究する過程で誰でも一度は想い廻らすものであろうが、「温羅伝説」は古代山城が戦斗に使われたとするほとんど唯一の説話である。

昔、鬼の城一帯には朝鮮から渡って来た温羅という一族が勢力をふるっていました。その頃吉備津彦命が吉備を平定するため大軍をひきいてこられたので住民は温羅退治をお願いしました。両軍は鬼の城と中山に陣所をおいて激しく斗いました。

まだまだ話は続くがこの位にして、この説話の原型は征服者が被征服者の名前をもらうことによってその地方の始祖となるという一種の服属譚であり、物語としての体裁がととのったのは室町時代といわれるが断辺的な伝承としてはもっとさかのぼるのではなかろうか。例えば鬼の城をめぐって戦斗が行なわれたという記述を、国家的統合を目論む大和政権とこれに対立する吉備の勢力の間に緊張した対峙の時期があり、その様な情勢の中で山城は作られていったという風に解すれば、これは歴史の問題となる。それではその様な時期とはいったい何時であろうか。

『日本書紀』には雄略紀を中心に吉備の反乱を伝えるものが数回にわたって登場するが、その中で反乱の名に値いするのは479年の星川皇子の反乱であると思われる。

この年雄略天皇没す。母である吉備稚媛にそそのかされた星川皇子は大蔵の官を押さんとして誅殺される。このあらましを受けて吉備上道臣等は星川皇子を救うため軍船四十艘を率いて畿内に向うがすでに乱は鎮められたと知って空しく引き返した。天皇は上道臣等を責めてその領むる山部を奪われた。

大和勢力が吉備の小反乱を契機として徐々に吉備の勢力をそいで行くその始まりである。ここに言う「山部」とは大和朝廷で直轄領の山林を監理した品部であり、造船・製鉄のための燃料に関る。吉備が強いと言われたのはその鉄と水軍のためであり、これでその一画が押さえられたわけである。ここで想い起すのは温羅と鍛冶・製鉄集団との結び付きである。熊山俶弘さんの『温羅の鬼の城』(『幻の高安城』和四集)によるならば、「矢が温羅の片眼を射抜いた」こと「温羅の流す血が血吸川となった」こと「温羅が雉に変身して逃げようとした」こと全て鍛冶集団の存在を指し示す寓話であるとされている。「山部を奪う」と一言で言っても その統制には大和側も長い年月にわたって手を焼いたのではあるまいか。温羅伝承はこんな歴史の中に原型を持っているに違いない。

続いて『書紀』安閑天皇二年(533年)には屯倉を集中的に設置した記事が見られる。それも播磨国に2つ、備後国(井原の辺りと思われる)5ヶ所、蚺娜国(神辺平野)2ヶ所という風に吉備を東西から包囲する形でである。ここで備後の国(現在の)が大和勢力による吉備攻略の拠点となっていることは重要である。おそらくこの頃から欽明十六〜十七年(555〜556年)吉備の中枢に白猪屯倉・児島屯倉という最後の楔が打ちこまれるまでの間が、吉備勢力最後の力をふりしぼっての大和勢力との攻防の時期であったのだ。鬼の城が少くとも現在の如くに整備されたのはこの時期であると思われる。そして「茨城」「常城」とは大和勢力が吉備攻略のために対抗上この備後の地に築いたものではないか。相対立する勢力が互いに朝鮮式山城を拠点として攻争をくり広げる — こんな妄想を抱いているのは現在私(達)だけであるかも知れず もしもっと納得のいく説に出会ったなら すぐにもこの妄想はエイヤッと投げ捨てて足で踏みにじり、唾の二、三回もかけてやろうかといった卑屈な心算で

コクヨ コピー210 (33×22)

すが、鬼の城が正史に記載なく、茨城常城が宮殿であるにもかかわらず築城時期・目的共に明らかでないことの一応の証明にはなっていると思う。「お前の言う様な攻防戦は正史にないではないか」と言われる向きには、大和朝廷の方針だからじゃないですか と答えておくしかない。『記・紀』の史観によるなら朝廷のやる戦さは「言向け和はす」といったものであったらしいからである。

▨ あとがき

どうも知っていることを全部並べたという感じで底の浅さが透けて見えて恥しいかぎりである。しかも本来ならば現在までの山城研究の歴史と成果を克明に追わねばならぬところ、のっけから憶測・推論の類となってしまった。しかしこの文で私が示したかったのは何よりもこれからの自分の学習の向う方向性である。人はこの一文を〈ザル理論〉と呼ぶかもしれず、私もまたそう思うが、ザルならばより大きなザルを作りたい。よしやそのことのために漏らす水の量が増えようとも大きな獲物をとるのは大きなザルによるしかないから。

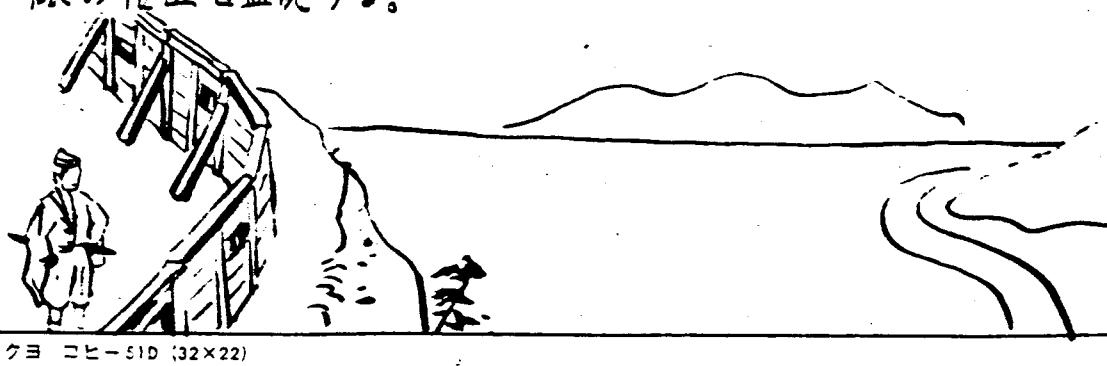
〈つづく〉

山城のイメージ

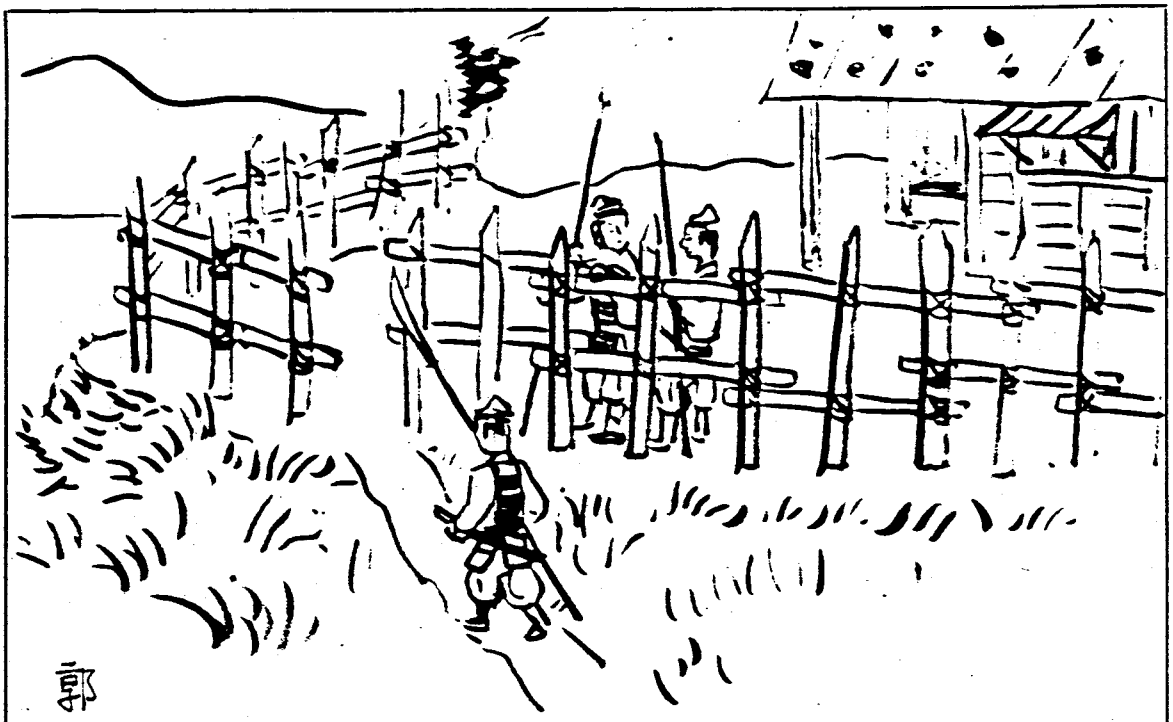
備後中世史研究会会員　吉田和隆

山城を十程訪ねてみた。次第に山城のイメージが明瞭な物になる。拙いながら、絵に表はしてみて、見られた人に誤りを正して戴こう。そう考へた。

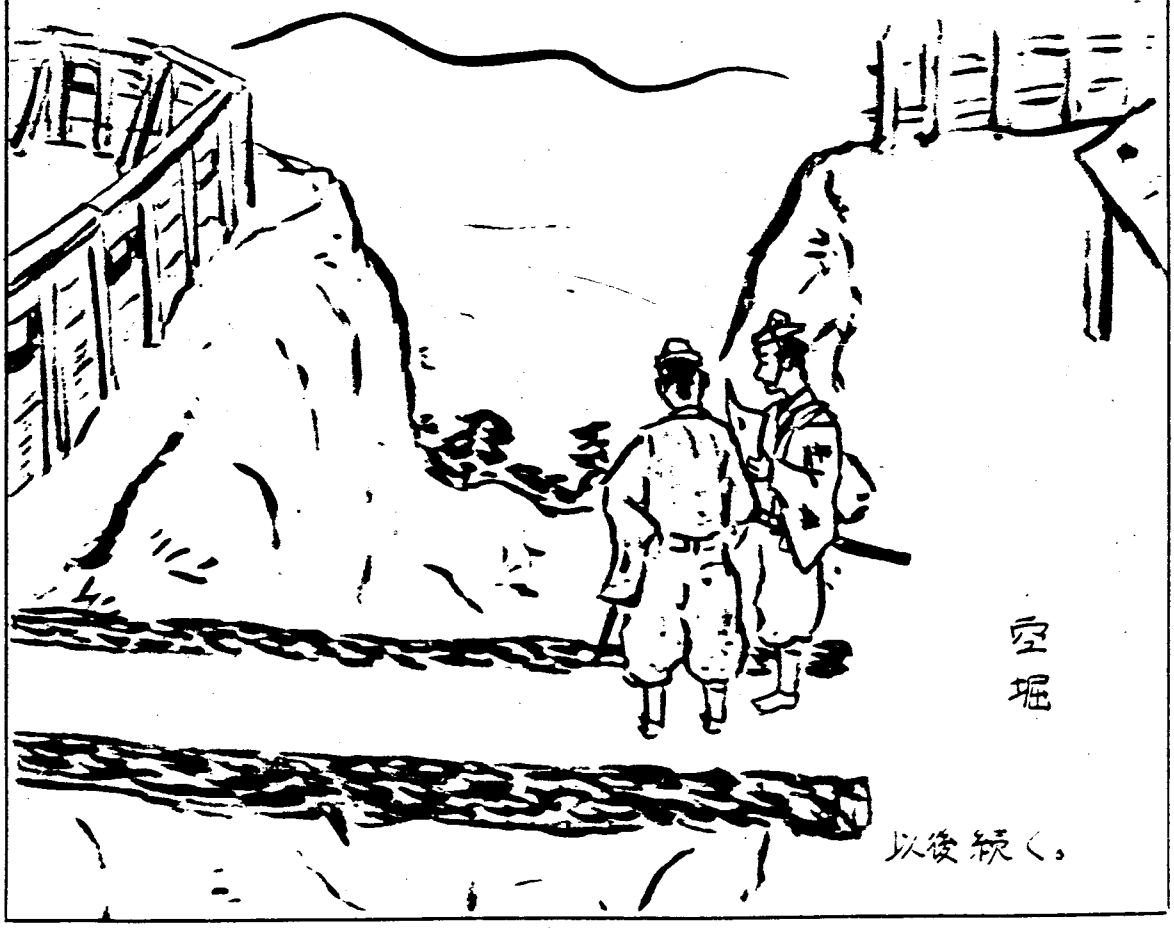
城主の館が、土塁と堀に囲まれて在る。その背後の山に、城が築かれている。最上部の本丸は、板塀で囲い、城番の寝起きする小屋が見える。なだらかに下る斜面には、所々に郭が石垣で防備している。遠くの尾根には、望楼が建てられ、敵の接近を監視する。



コクヨ　コピー51D（32×22）



郭



空堀

以後続く。

コクヨ コピー-51D (32×22)

Vol. 2 No 1

（資料紹介）

備後國福山御領分古城記（二）

田口義之

安那郡

楓山　山名師氏末流　先主

神辺　山名 宮内少輔 氏政
　同 宮内少輔 忠興
　杉原 播磨守

竹田村　皆内 左馬之助

同　三吉 丹波守

上御領村　瀧山 佐渡守

同 茶磨山 戸户 孫六 要安
（註）刊本備後古城記には秀安とある。

同 下 宮 入道 光重
天文廿一年毛利ニ攻ラレ没ス。

湯野村 持城 宮 次郎左衛門

中條　同 若狭守

神辺杉原左衛門ト相戦 此宮氏戦死人 極之本を以為墓 因名中戦山 宮氏子孫断絶 家臣高尾 江草 小林 猪原 一名 計下其外 討死卒人退散人。

コクヨ こヒ-51D (32×22)

曽祢原村　山名　清左衛門
　宮若狭守領地　今改徳田村ト。

西中條　宮　次郎左衛門

同東　宮　若狭守

(註) 毛利家文書三〇七号等に宮次郎左衛門尉の名あり。
毛利家文書三〇七
「去月朔日　宮次郎左衛門尉要害落去之刻
即時至中途出張之由候　毎事御馳走之通
喜入候　猶隆兼　隆著可申候也　恐々謹言
　六月十六日　　義隆
　　(大内)
　　毛利備中守殿（隆元）」
(註) 水野記（県史所収）によれば宮若狭守隆信という者が中条や道上の寺々で寺領を寄進している、この若狭守と同人か。

三谷村木上　金尾　遠江守
　金尾氏々之寺金尾山竜花寺。

山野村　宮　若狭守持

北山村　宮　次郎左衛門持

同　同　越後守高音
　戦死ス子孫断絶　高尾　円下其外討死窪人城焼拂破却ス。

粟根村　粟根　長門守
(註)「横山家文書」「知新集」によれば杉原盛重の家臣に粟根氏がある。

同　　梨羽　中務丞　景盛

(註) 梨羽氏は小早川氏の庶家で景盛は隆景の重臣。

中野村宮氏持家臣栗木　兵部　近氏

同　　内藤　伊賀守

同　吉田何某家臣岡本　何某

下賀茂村勝渡山　宮　正味斎

(註) 天文十六年四月毛利氏湯浅氏等は尼子方の当城を攻めている。

「閥閲録」104ノ1、湯浅権兵衛4号

「去四月外郡五ヶ村動時、至勝渡山面毛利方出張之處有同陣、御馳走之通元就注進之趣慥令披露候、尤神妙之由得其心可申之旨候、猶元就可有演説候　恐々謹言　　隆言(花押)

(天文十六)六月二日　　隆著(〃)

隆満(〃)

湯浅五郎次郎殿」

宗岡賀茂村境　城山南ハ往来　西北東之方沼也　落城之後田地トナル　尼子幕下ニ付戦死　一類断絶　寺勝渡山西光寺此時断絶ス

百谷村　　宮　治部大夫　勝岡

同　高山

小井ノ城カケ迫　賀茂村境ニ有之

東法成寺　　宮　兵部大夫　勝信

宮代々之居城勝渡城落時ニ戦死　子孫断絶　寛永年中城ノ麓ニ建ル。

同　　桑原　縫殿介

備中　小田郡

笠岡　　小見　左衛門
同　　村上　八郎左衛門

同　　須山　備中

神之島　　小見山　治部
御醍醐天皇御宇元弘ノ頃ノ人ナリ。

同　　池田　主殿

北木島　　喜多木　八郎

真鍋島　北木ハモ　真鍋　宇右衛門

廣嶋　　高田　河内守　正重

大下村　　同人

有田村　　小見　備中守

篠坂村　　橋　悪五郎
悪五郎ノ墓石アリ

稚木村　　藤井　能登守　入道好玄

同　タタミガ城　南　三河守　景久

大三村

コクヨ　コピー51D　(32×22)

（次号へつづく）

古代山城を訪ねて

鬼ノ城　　岡山県総社市奥坂 鬼城山

I 鬼ノ城への交通

① 国鉄吉備線の服部駅から新山部落を経て、鬼ノ城の西の駐車場へ行く方法が自動車で通行できる唯一の道で有り、距離約6km。

② 吉備線の足守駅から西阿曽を経て阿弥陀原を通り、鬼城山へ行く道は歩く事しか出来ず、しかも道がはっきり悪いが距離約5kmで一番近い。

③ 中鉄バスの足守行へ乗り、西阿曽口で下車して此より西阿曽口を経て阿弥陀原を通り鬼城山へ行く方法は、距離約4km。

④ 吉備路自然歩道に指定されている道は、阿弥陀原より岩屋の養鶏場を経て来る道は、直接阿弥陀原から鬼城山へ登る道に比べて約2km程遠い。

(注意) 服部駅は無人駅でタクシーも停っていないので、総社駅か足守駅で降りてタクシーに乗るのが良い。

II 城内の遺構見学

乗用車等で来ると鬼ノ城の西方に有る駐車場に着き、此に簡単な説明板が有る。そこから山に入り500m程行けば、左右に道の分れた所に出るが、その少し手前の切り通しが土塁である。(図面①) 左右に分れた所を右へ曲り、しばらく進むと右下に一段の列石が続き、此が内側の列石で、更に右側の崖に外側の石垣の一部が残っている。更に進むと右崖下に一段の列石が有り、此を過てしばらく進むと第1第2水門の土塁へ出る。右下に水門の石垣、左側に水門の集水口を見ながら進む。此水門の集水口より左側山の方へ水道(みずみち)が続き、ため池へ向っている。此ため池へ行くには、水門を少し過ぎて小さな道が左側へ通じてしばらく歩くと少し幅の広い道に出て、左側へ行くとため池に出る。左右に分れた所に戻り、(図面②) しばらく進むと右側に石垣が有り此先端の眺望の良い所を第1展望台と称されている。(図面③) 先に進むと道の左側下方に少しだけ列石が有る。更に進むと道の左側が見晴らしとなって、此が内側の土塁である。此がしばらく続き少し切れている所から左側の少し高くなっている所へ登ると、第3水門上方のため池が見える。(図面④) 少し切れた所へ戻って先に進むと右側に列石が長く続いている。此から列石の切れた所までは道が続かず途中で曲がっているので、曲がらずに雑草をかきわけながら列石に沿ってまっすぐに進むと、列石の切れた所が有るので、そこで左に曲がると第3水門に着く。右手に石垣、左側に集水口が見える。第3水門上方のため池から流れている水道が流れ、深い溝に

なっている。更にしばらく行くと左側に土塁が有り、その土塁の切れる少し手前の所に右側に石垣が有り、此突端を第二展望台と俗称されている。(図面⑤) 先に進むと左右に分れる道が有り、右に曲ると第4水門の上方に出て左からの道と合流して、阿弥陀原へ向う。此左右に分れた道を左に向う。(図面⑥) 第4水門の上方を過ぎて更に少し進むと登り坂になり、登っていると左右に分れる所に出て右へ行くと第1城門に着く。此を右へ進むと第4水門に着く。此は土塁の所が壊れ、そこに水が通り内側の土塁と外側の石垣が有るので二段に水門がなっている様な感がする。左右に分れた所に戻り先に進む。(図面⑦) 登り坂を登り切った所の上に4本の柱で出来たトタン屋根の小屋が有り、そこから須恵器を出土した。更に進むと第5水門の土塁に着く。右下の石垣は大きく水がいつも良く流れている。此第5水門のすぐ上を第3展望台と俗称されている。(図面⑧) 此の石垣が城内中で一番大きく、広く、良く知られている。此は総社平野、阿弥陀原、足守の山々、血吸川の上流、岩屋等が見える。此から登りながら進むと左側に第5水門上方のため池が見える。更に登りながら進むと右側に土塁を見ながら進むと、左右に分れる道に出る。(図面⑨) 此を右へ曲ると岩屋へ通じるが、その途中に第2城門があるが遺構は残ってなく推定である。此右へ曲る所を左へ行くと右側に土塁が切れ切れに見える。そして下り坂を進むと左側に第4水門上方のため池が見える。(図面⑩) 此は元、モトクロス場になっていたのでその時の造成工事の時、須恵器、土師器が出土した。右側に土塁の切れ切れを見ながら鬼城山へ登る。鬼城山の山頂の展望台が有り、そこに展望板が置いている。(図面⑪) 此から最初の右へ分れた所へ戻り、土塁の切り通しの下から右へ入ってしばらく行くと第3城門へ着く。

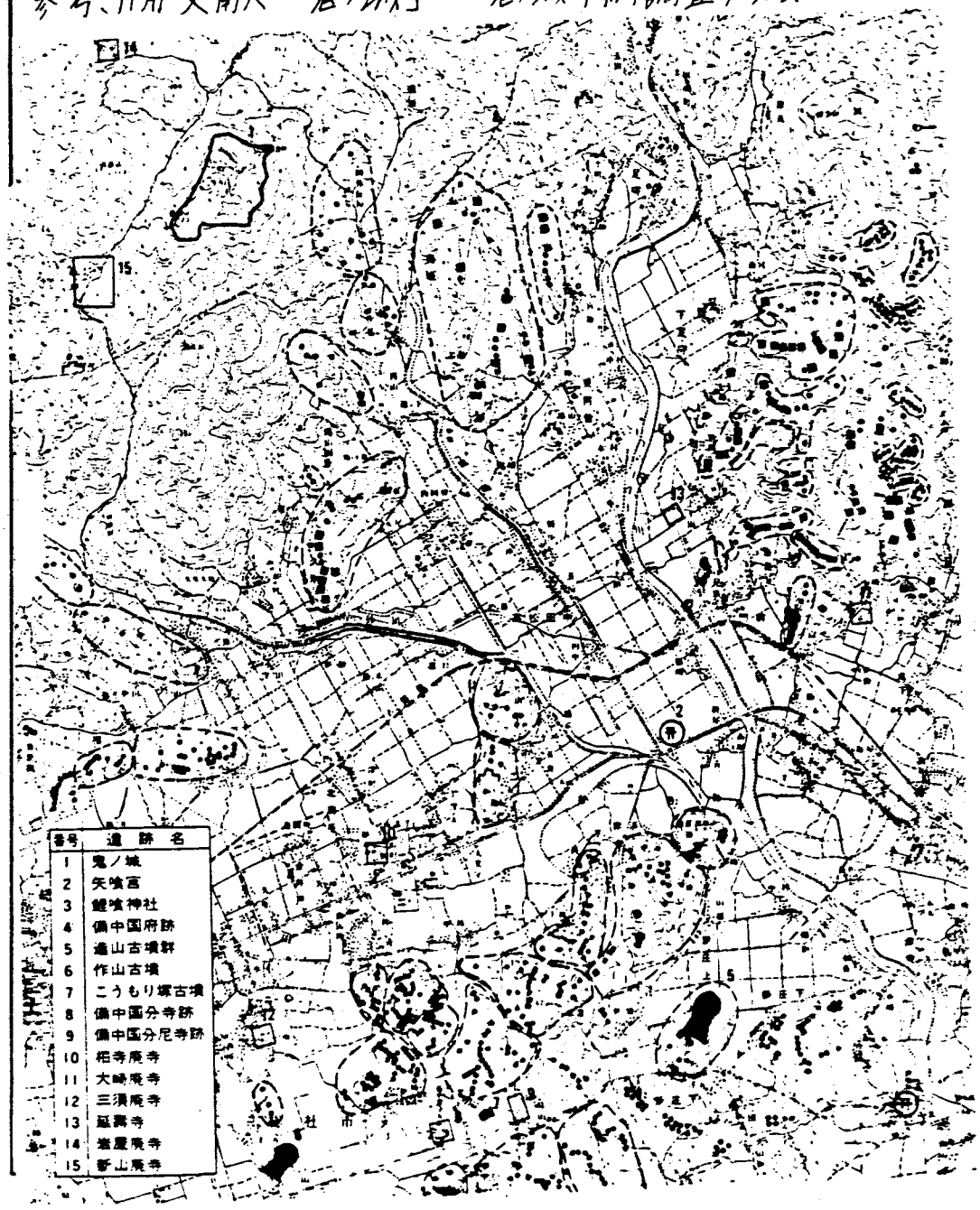
III 周辺の遺跡と鬼ノ城の全体的な感想

① 鬼ノ城の南西に新山、北西に岩屋が有り、鬼ノ城と共に山岳寺院の盛えた所で有る。南に総社平野が広がり 群集墳、巨大墳、巨大石室、国府、国分寺、式内社、大集落等が有り、著名なものは倉敷市上東遺跡、楯築墳丘墓、宮山墳墓群の特殊器台、造山、作山古墳、こうもり塚、千足の装飾古墳、吉備津神社、総社宮等が有る。又、鬼ノ城に接しているものでは、阿弥陀原古墳群、板敷田古墳群、穴観音古墳群等が有る。

②頂部および頂部付近の起伏は比較的に緩やかな準平原地形を呈しているのに対し、城内の最低地点285mから下は急傾斜となっている。本城の外郭線の平面の特長は随所に「折」をもっており、直接的な平面が常に一定の角度でなっており、湾曲している所は、

まったく見られない。又、本城は南に防備を強化している。又、本城は水門の通水溝開口部が水門の石組蓮樋上部に有る。又、水門の石積み方法は巨石を用いた牛蒡積み(ごぼう)方法を取っている。又、水門と城門とが隣接して築いてなく離れている。　総延長2.8KM、面積29ha。城内にいくつかの削平地、8つのためい池。石塁(土塁)の幅は普通7M、高さ6M。石の積み方は、長石を横位にして垂直に積む方法と略方形の石材を重箱積みにする方法が多い。又、本城は中世の山城とされていた。

参考、引用文献「鬼ノ城」　鬼ノ城学術調査委員会



1/2000

息城付図参考

⊙1 平板点

石塁

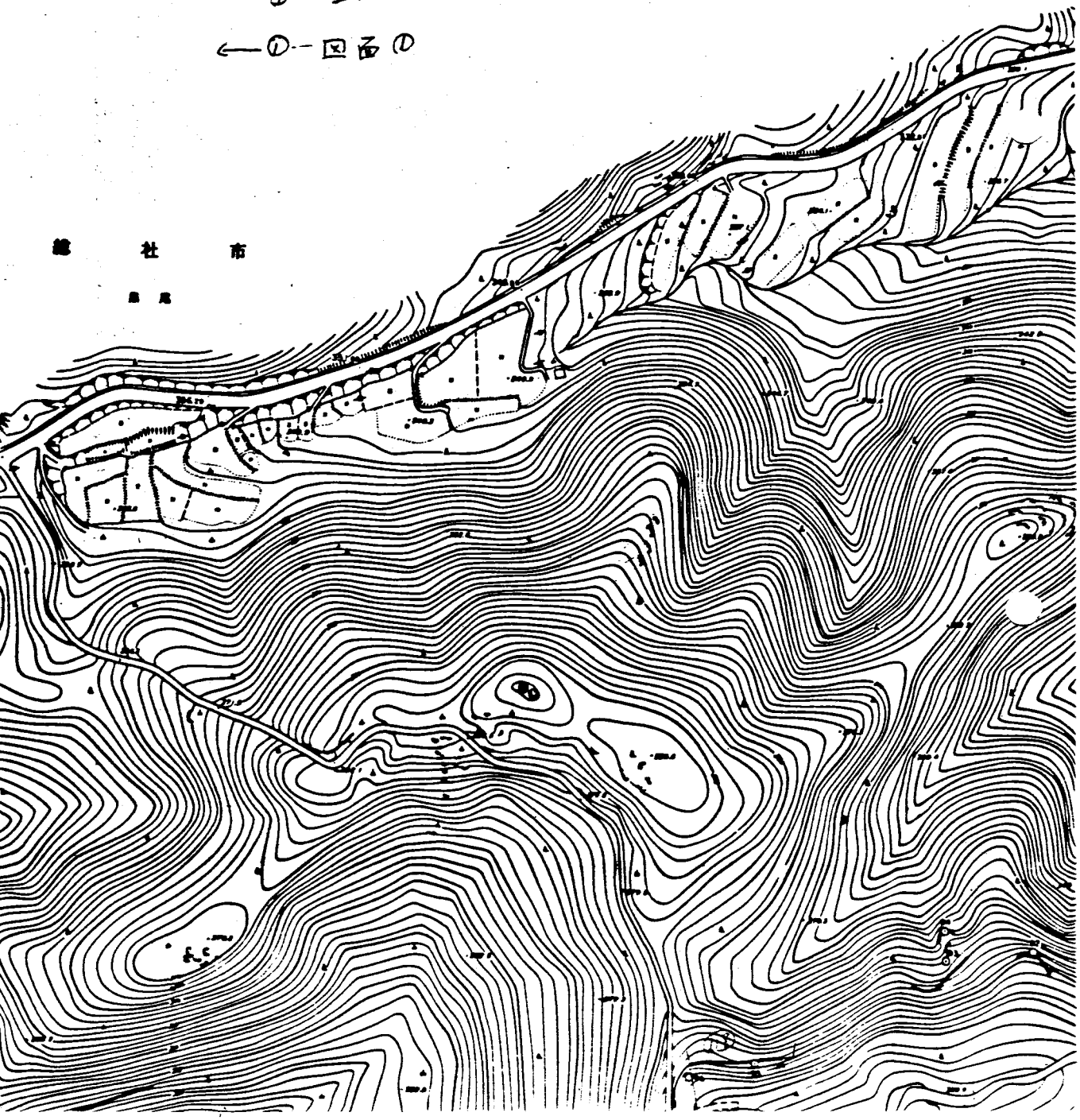
石垣

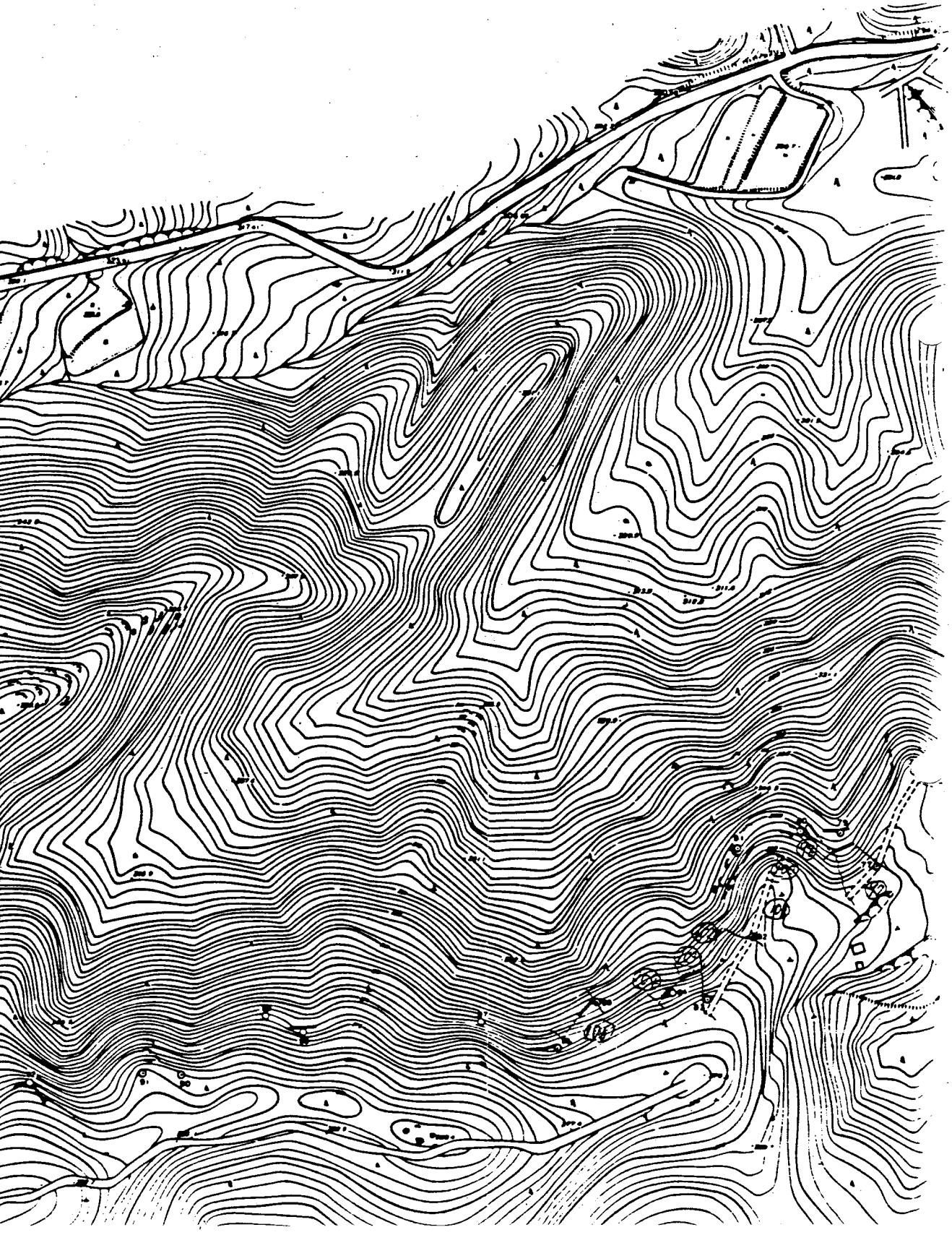
土塁

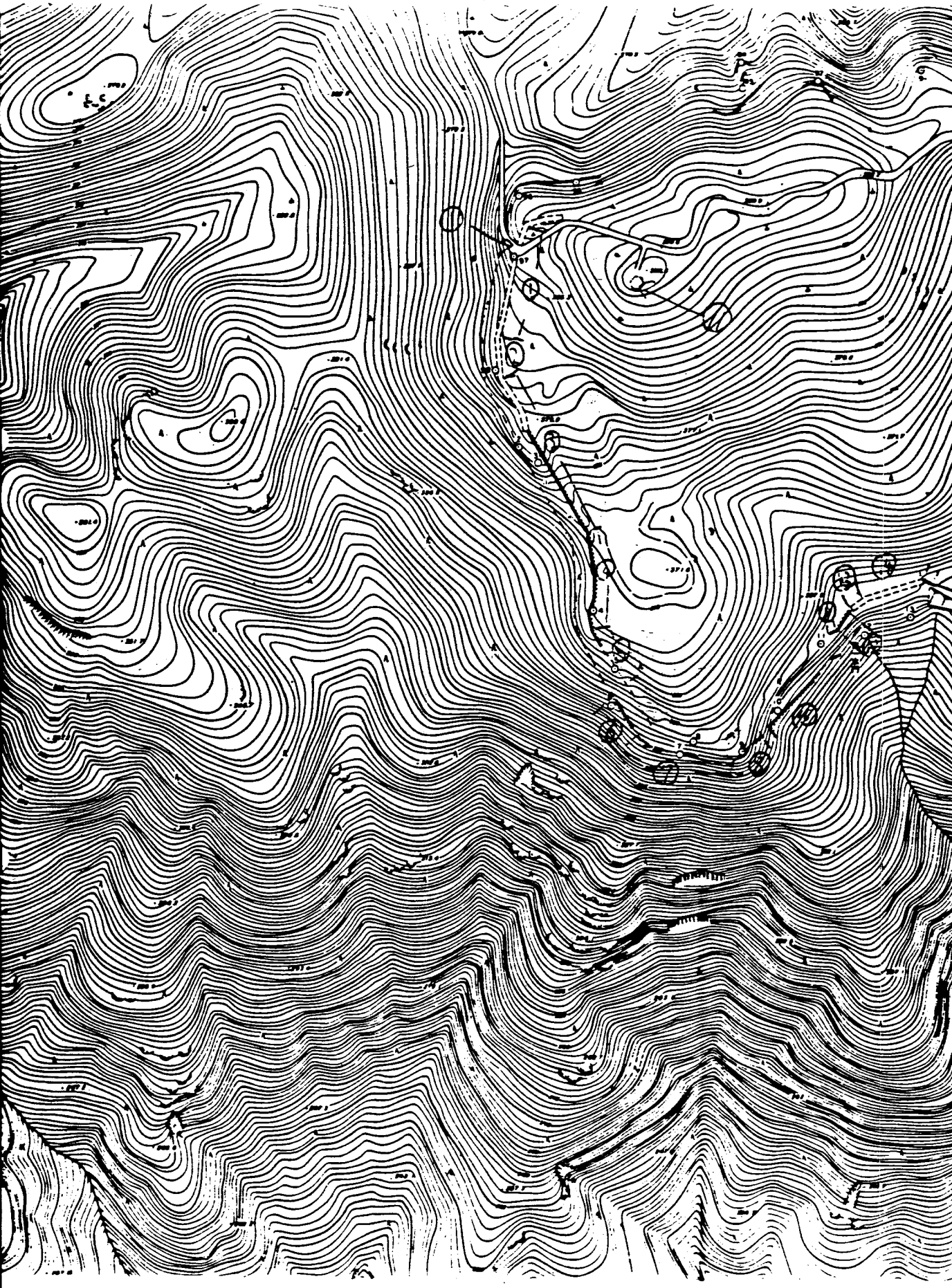
推定線

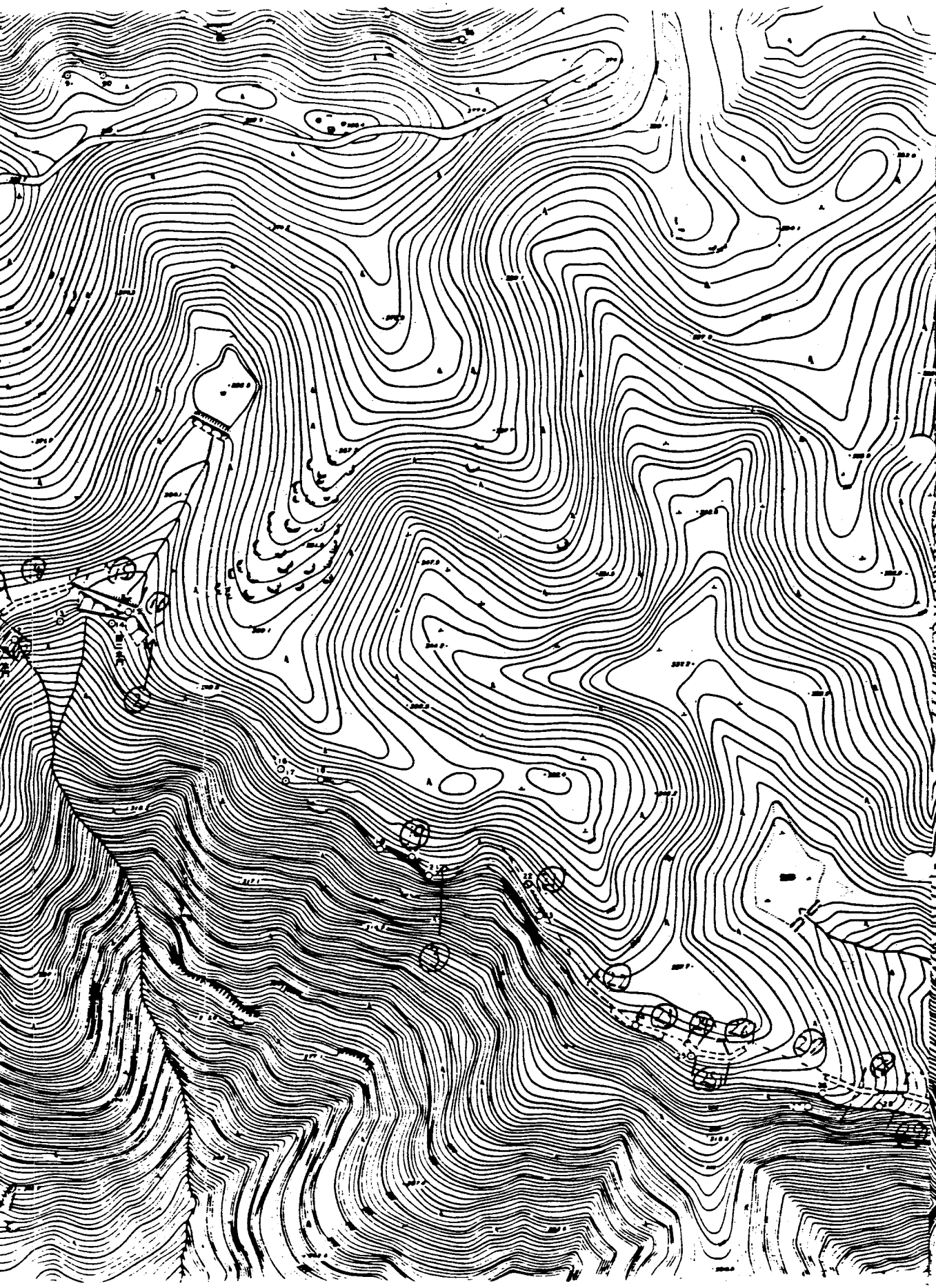
① 塁状区間（第1）

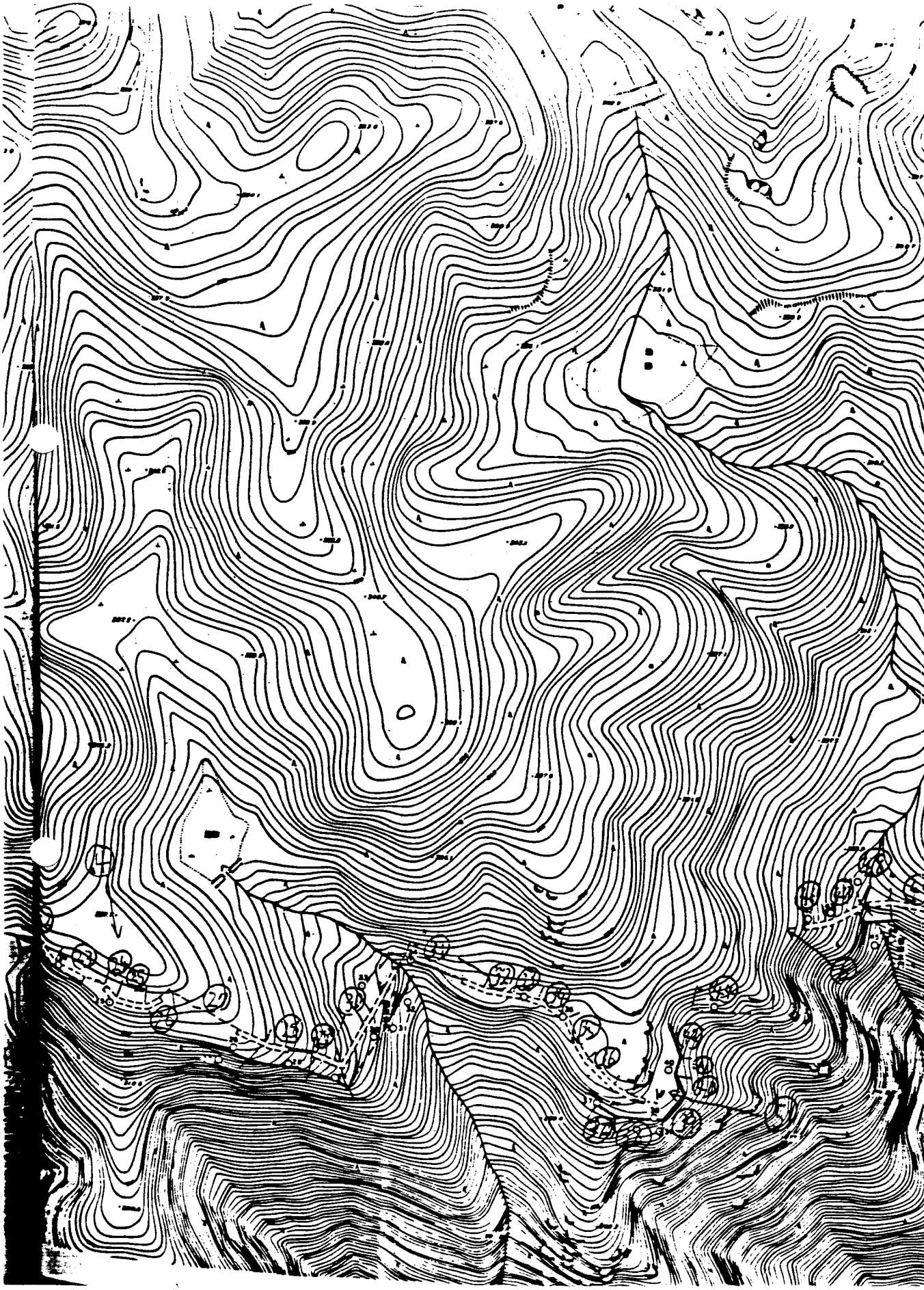
←①--図面①

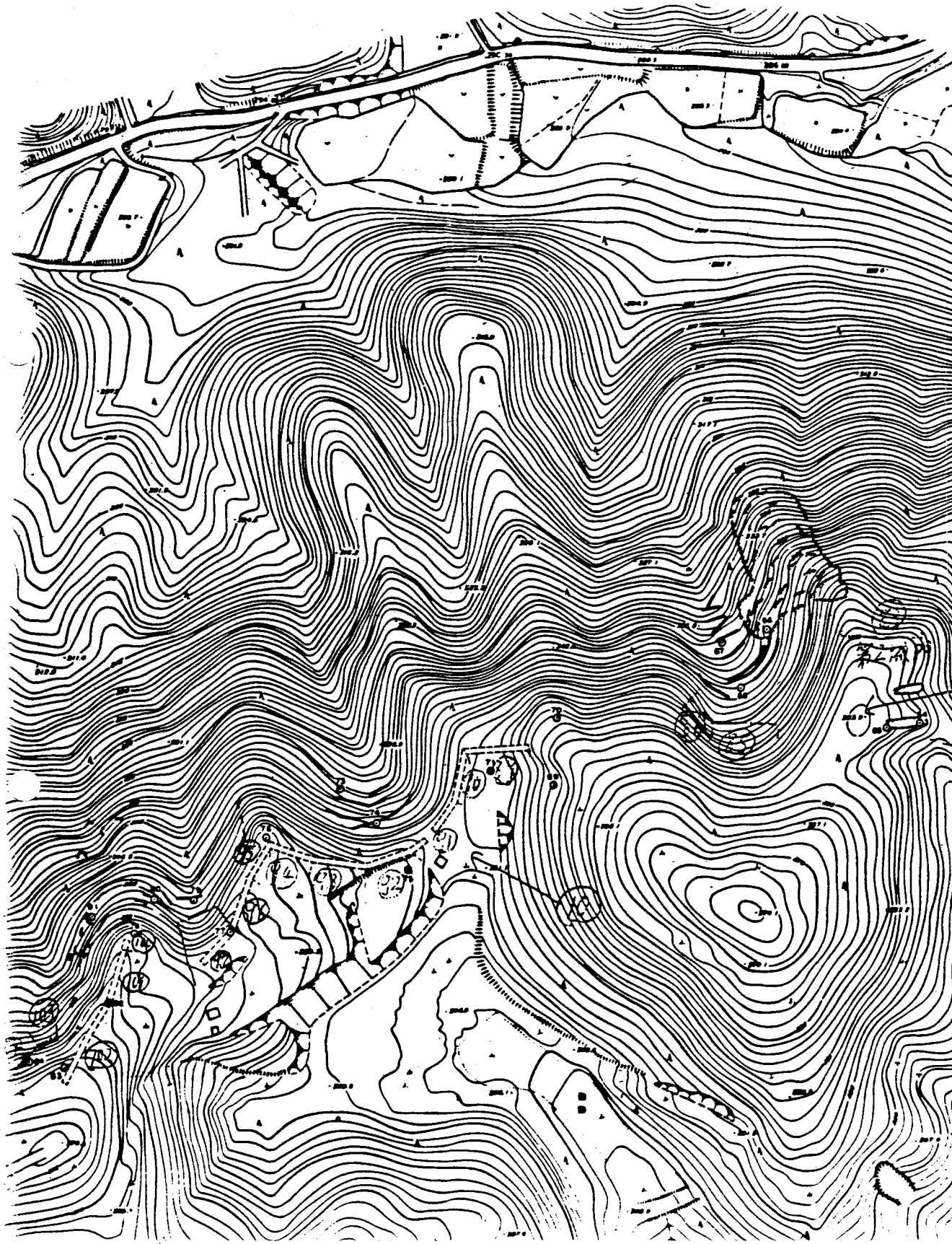


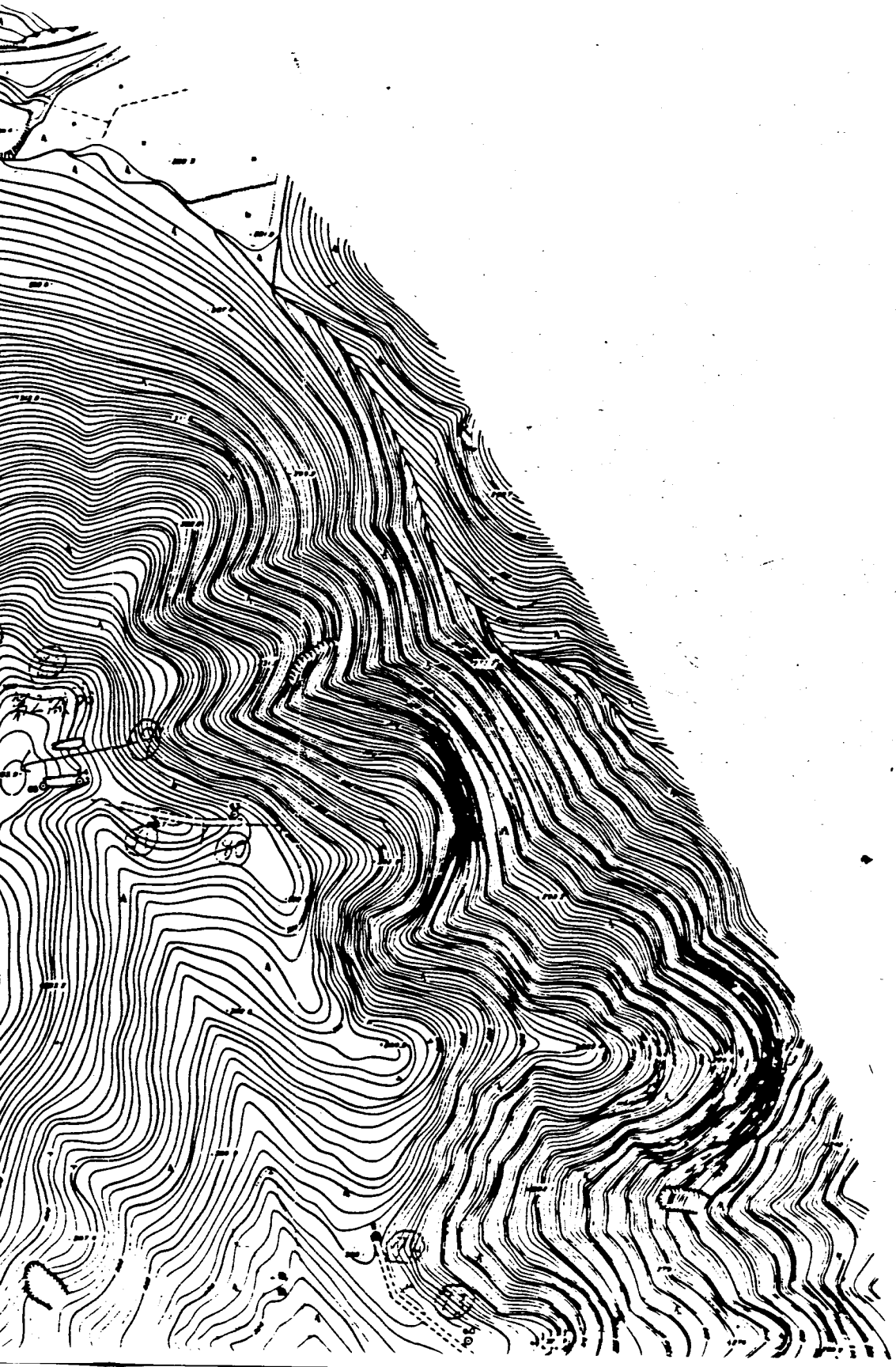






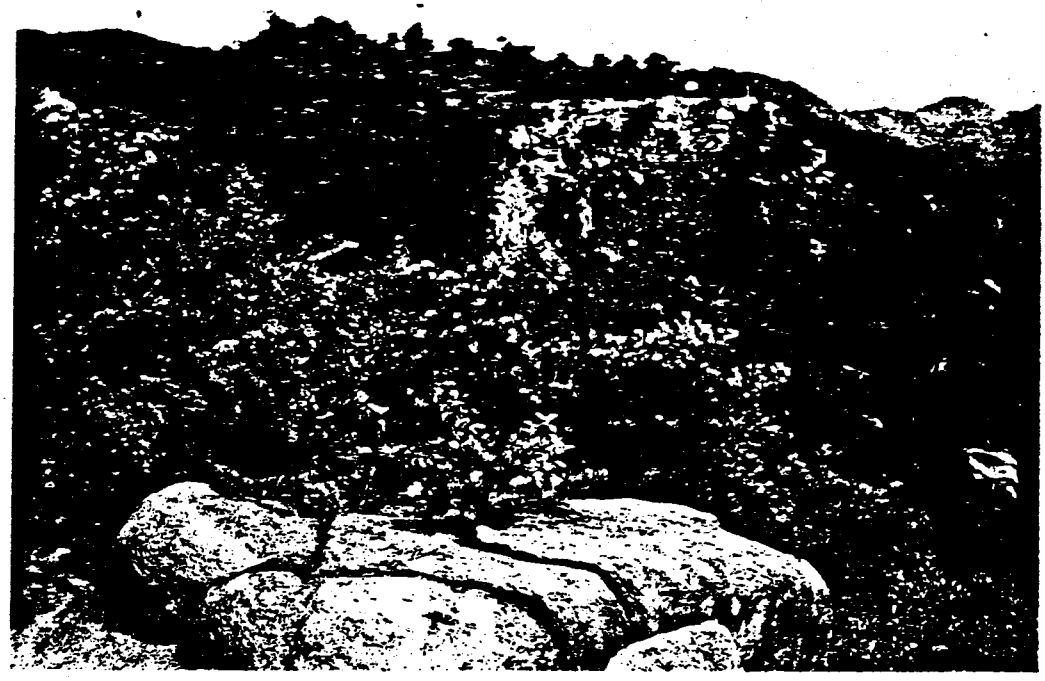





第二水門

1　堅固な外側石垣－第56～第61畳状区間－（南から）

2　敷石の被覆状態　第58　第61畳状区間　（西から）



1　第56－第61畳状区間、外側石垣遠望(南から)

2　屏風折の外側壁　第5水門石垣－第61畳状区間　(南から)

◎編集後記◎

寒風にふきさらされながら山城跡を歩き廻る楽しみ、これは山城マニアにだけ許されたものです。しかし、山歩きには慣れた我々も文章だけは大のにがて、「山城志」2号も原稿集めには四苦八苦です。なんとか発刊のはこびとなりましたが内容の点で"どうかのう"と疑問しきりです。今後はもっと充実したものにしたいものです。（Y.T）

¥80

備陽史探訪の会城郭研究部会発行
昭和58年1月16日「山城志」第1巻1号
部会連絡所 福山市新浜町1の又(七森方)

コクヨ コピー-21D (32×22)